

アシエンダ研究の系譜

著者	宇佐見 耕一
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	ラテンアメリカレポート
巻	4
号	3
ページ	9-15
発行年	1987-09-20
出版者	アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00006677

アシエンダ研究の系譜

・宇佐見耕一

はじめに

アシエンダ (hacienda) は、プランテーション (Plantation)、エスタンシア (estancia) とならぶラテンアメリカにおける大土地所有 (ラティフンディオ: latifundio) の一類型である。それは、メキシコからチリに至るまでの高地に主として形成され、今世紀に至るまで同地域の農村における支配的な土地所有形態であった。そのため、同地域の農村史研究は、アシエンダ研究を軸に展開されてきたと言ってよく、この部門は、ラテンアメリカ社会経済史研究のなかでも最も進んだ研究分野のひとつとなっている。

ひとくちにアシエンダと言っても、時代により、また地域によりその構造はきわめて多様であり、さらに今世紀に入ってからのそれを取り巻く社会・経済環境の急激な変化によりアシエンダも大きな変容を余儀なくされた (たとえばメキシコでは、1920年代以後に行なわれた農地改革により、ここで取り上げるような伝統的アシエンダは消滅している)。そうした多様性を反映して、これまでに多くのアシエンダに関する見解が提示され、そのなかには相互に対立するものさえ含まれている。そこで本稿では、質・量ともに優れているメキシコのアシエンダの研究を中心に、その研究史を概観し、さらにテーマ別に論点を整理しようとするものである。

なお、この分野に関する学説史的研究として、

すでに M・モルナー(1)、R・キース(2)、K・ダンカン(3)のものがある。

1 アシエンダ研究の歴史

メキシコのアシエンダ研究の歴史は、次の3段階に分けることができる。1. メキシコ革命前後における問題提起の段階(1910年前後)、2. 外国人研究者により学問的研究が開始された段階(1920年代以降)、3. メキシコ人研究者を交えての実証的事例研究が増加する段階(1960年代以降)、以下この順に従い、メキシコのアシエンダ研究を事例として、その研究史を概観してみる。

1. メキシコ革命前後における問題提起

メキシコにおいてアシエンダが社会的に注目されるようになったのは、1910年に勃発するメキシコ革命前後であった。当時のアシエンダに対する関心は、学問的というよりも、それを農村問題の一環として捉えるという社会的なものであった。

この時期にメキシコのアシエンダ制について問題を提起した論者に、A・モリーナ・エンリケスがおり、『メキシコにおける重大問題』(4)が代表作となっている。彼は、弁護士であると同時に新聞紙上にも多くの見解を発表する論客であり、その

思想は当時流行していた実証主義に大きく影響されていた。彼は、アシエンダがメスティソやインディオ農民との間で土地に関する係争を続けることによりその農業生産の拡大を阻げ、またアシエンダ労働者を債務などにより隷属状態に置いたと指摘している。そして、アシエンダ自体、非生産的組織であるとその存在を批判し、メキシコの抱える諸問題の原因のひとつがアシエンダにあるとの認識を示した。

彼の成した業績には次のような意義が認められる。まず、アシエンダをメキシコにおける社会・経済問題の根源のひとつであると社会に告発した点である。そして、それは単なる社会的告発に止まらず、農地改革の実施に道を開くものとなった。事実、彼の思想は、メキシコ革命の指導理念のひとつとされ、さらに彼自身、農地改革を謳った1917年憲法・27条の条文作成にも関わっていた。

次にこの問題を取り上げた者に、アメリカジャーナリストJ・K・ターナーがいる。彼の著書『野蛮なメキシコ』(5)は、ディアス体制(1876年～1911年)とそれを支持する米国内の勢力を批判する目的で書かれたが、そのなかで当時のメキシコ農村の状況にも触れている。彼は、メキシコ中央高原のアシエンダにおけるペオン(peón:アシエンダ農民)の劣悪な生活条件を記した後、広大なアシエンダが存在する理由は、ディアス体制にあるとした。彼によると、ディアス体制とは、各種の利権をディアス支持者に分配し、その見返りとして彼らから支持を取りつけるというシステムであった。そして彼は、そのようなシステムこそが少数のディアス支持者に富を集中させ、大衆から土地を奪い、さらに彼らを隷属状態にしたと批判している。

彼の著作のなかには、事実を誇張した箇所や、後の研究により事実誤認であると指摘された箇所も存在する。それにもかかわらず、アメリカ側からメキシコの農村問題を指摘し、この問題に対する社会的注意を喚起したという点に、彼の成した業績の意義が認められる。

2. 外国人研究者による学問研究の開始

メキシコのアシエンダに関する学問的研究は、1920年代にアメリカ人研究者により開始された。その代表的なものにG・M・マクブライドの『メキシコの土地制度』(6)とF・タンネンバウムの『メキシコの農地革命』(7)がある。

マクブライドは、地域によるアシエンダの多様性を認めつつも、その性格をおよそ次のように規定している。すなわち、アシエンダは自給部門を持つと同時に、何らかの特産品を生産する。ペオンと呼ばれる労働者の多くは農奴的存在であり、慣習や債務関係によりアシエンダに結びつけられていた。また、アシエンダは、経済的価値以外にも社会的価値も有し、通常都市に住むアシエンダ主は、メキシコの経済のみならず社会・政治をも支配していた。

タンネンバウムの関心は、1910年に始まるメキシコ革命を契機として実施されるに至った農地改革に注がれているが、その背景として農地改革以前の農村の状況も彼の視野に収められている。彼は、少数地主への土地集中＝大土地所有制の拡大が、植民地時代以来のメキシコ農村史における一貫した傾向であると主張する。そして、植民地時代に形式的に存在していたインディオに対する王室の保護が、1821年の独立でなくなり、また、土地の共同体による所有を禁じたレルド法(1856年)が制定されたことによりインディオ共同体の共有地喪失とアシエンダの拡大が促され、さらにディアス政権により採用された土地政策がそれを決定的なものにしたと論じている。

この両者の研究は、債務奴隷的なペオン、アシエンダは社会的政治的価値も有するという点、ディアス期における急激なアシエンダの拡大とインディオ共同体の解体というアシエンダに関する諸見解を提示し、後のアシエンダ研究にきわめて大きな影響を与えることとなった。

3. 事例研究の増大

1960年代以降、アシエンダに残された一次資料

をもとにした事例研究が本格化し、70年代になるとその数は急速に増加していった。この段階では一次資料をもとにした研究方法が確立するとともに(8)、事例研究の蓄積にともない、アシエンダ間の比較、さらにはラテンアメリカの他の大土地所有類型との比較へと、研究は広がりを見せている(9)。

そのようななかで、従来からあったアメリカ人を中心とする外国人による研究に加えて、メキシコ人による研究も大幅に増加していった。この段階でのメキシコにおけるアシエンダ研究の動向は、大きく二つに分けることができる。それは、エル・コレヒオ・デ・メヒコのJ・バサン(10)に代表される実証歴史学の流れと、メキシコ国立自治大学のE・セーモ(11)に代表されるマルクス主義歴史学・経済学の流れである。

とはいえ、両者とも実証的事例研究を行っており、その蓄積によりアシエンダのさまざまな機能が次第に明らかとなっている。そして、それらは、従来からのアシエンダのイメージやマクブライドやタンネンバウムにより提示された見解に対して修正を求めている。以下、この段階での議論をテーマ別にまとめてみる。

2 アシエンダとは

アシエンダの定義については、これまでに多くの議論がなされてきたが、そのなかで最も支持されているものにE・ウルフとS・ミンツにより提示されたものがある(12)。彼らの定義はおよそ次のようなものである。すなわち、アシエンダとは、少ない資本を用いて、小規模な市場向け生産を行っている農園であり、地主が隷属的労働者を使って運営している。広大な土地を支配するのは、商品作物を生産する目的の他に、ペオンに自給用作物生産のための土地を分配するなどしてその賃金の一部を代替し、資本不足のアシエンダの資金を節約していたためである。さらに、広大な土地を占有することは、労働者から他の就労機会を奪

い、労働力を確保する目的を持っていた。そして、アシエンダは、経済的目的を持つ他に、地主が社会的地位を獲得するための手段であるということも言える。(同論文において、プランテーションは、地主が隷属的労働者を使って運営し、資本蓄積の増進を主たる目的として、豊富な資本を用いて大規模な市場向け生産を行なっている農園であると定義されている。)

ウルフとミンツによるこうした定義に対して、多くの反論がなされ、モルナーもこの定義とは異なる型のアシエンダが存在することは明白であると述べている。しかし、彼らの定義は、典型的なアシエンダ像を示したものであり、アシエンダを定義する上でのひとつの基準となり得ると考えられている。

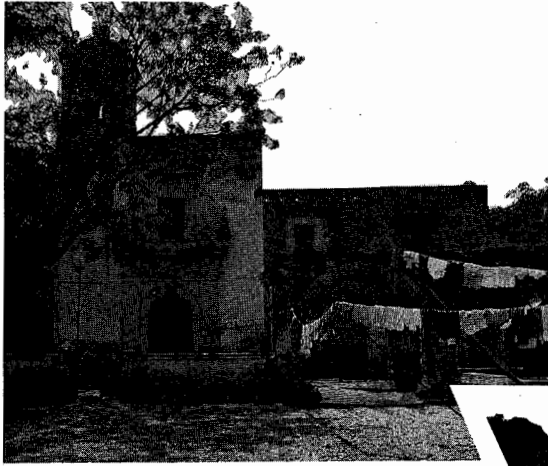
この他にアシエンダの定義に関する論点のなかで、それが自給自足的か市場指向的かという議論が活発である。前者は、F・シュバリエ(13)らにより唱えられ、後者は、A・G・フランク(14)らにより唱えられている。しかし、最近のJ・F・リアルとM・H・ロウトローによる事例研究(15)は、アシエンダ内の自給部門と市場向け部門における生産の比率が、市場の動向に対応して調整されていることを示している。

3 起源

アシエンダの起源に関する論争は、起源そのものに関するものと、その成立過程に関するものとに分けることができる。

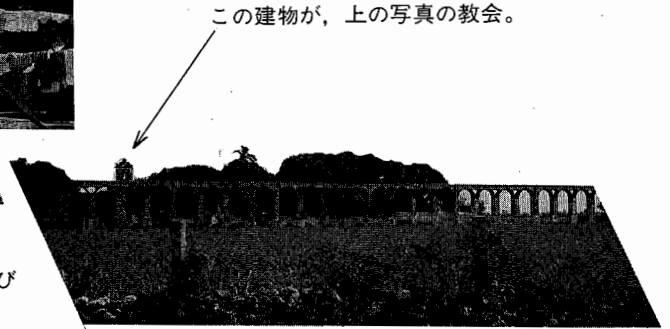
アシエンダの起源に関しては、1940年代まで、J・マクブライド(6)に代表されるエンコミエンダ制がアシエンダ制に転化したというエンコミエンダ起源説が有力であった(文献の(1)参照)。しかし、事例研究が進むに従い、エンコミエンダ制とアシエンダの直接的な関係を否定する事例も出現し、エンコミエンダ起源説は再検討を強く迫られている。

アシエンダの成立過程に関する議論には、二つ



アシエンダ・カルデロンの砂糖きび畑のなかを通る水道橋。農業用水、製糖工場用水として使用された。

メキシコ・モレーロス州、アシエンダ・カルデロンの地主の館に隣接する教会。現在、この館にはエヒード農民が住んでいる。



この建物が、上の写真の教会。

の異なる見解が並立している。その一つは、W・ボラー(16)、A・フランク(4)、C・ギブソン(17)らの主張であり、その要旨は以下のとおりである。すなわち、16世紀末から17世紀初頭にみられたインディオ人口の減少は、彼らによる都市への食糧供給を減少させた。一方、都市部では食糧需要が増大した。こうした状況が、スペイン人による農業経営に有利な状況をもたらし、アシエンダが拡大したとしている。これに対して、F・シュバリエ(13)やE・ウルフは、同時代のインディオ人口の減少や植民地経済の衰退が農産物価格の停滞をもたらし、自給自足的な組織であるアシエンダを出現させたとしている(文献の(1)参照)。

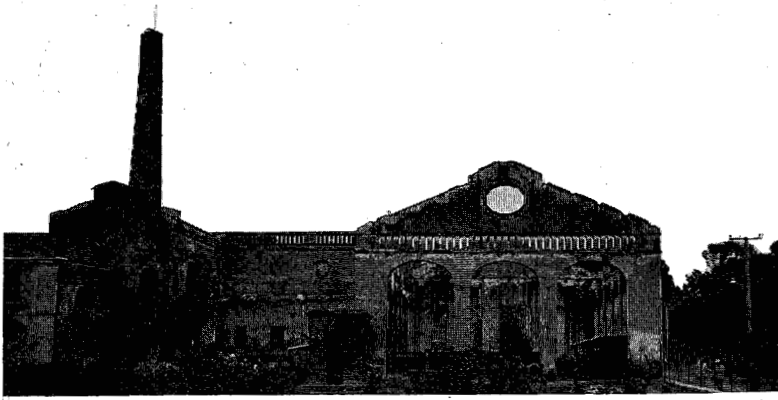
両者の主張は、ともに16世紀末から17世紀初頭のインディオ人口の減少という事実を前提としているが、その後の論理的展開は対照的である。この問題を解決するには、人口の推移、農産物価格の動向等の植民地経済の全体像を把握する必要があり、アシエンダ研究の枠を超えたラテンアメリカ植民地経済史研究の深化が求められている。

4 土地所有

土地所有に関する論点としては、土地集積の原因に関するもの、所有権の継承に関するもの、そして教会所有地に関するものがある。

アシエンダがなぜ広大な土地を所有するに至ったのかという土地集積の原因に関する代表的な見解として、F・シュバリエ(13)の非経済的要因を重視するものがある。彼は、アシエンダ主が土地を取得するのが収益を増大させるためではなく、競争者を排除して、アシエンダのある地域一帯を支配するためであると主張している。これに対してR・キース(2)は、土地に対する投資が、長期的にみて合理的なものであるとの見解を示している。こうした議論に関してモルナー(1)は、地方政治で権力を得るためにはたして土地所有が必要であったか否かという問題を改めて提示している。

次に、アシエンダの所有権の継承問題のみをみる。アシエンダには、何代にもわたり同一家族により所有され、しかもその領域が固定的なものであるとのイメージがある。事実、何代かにわたっ



メキシコ・モレーロス州、
アシエンダ・サン・カル
ロスの製糖工場（インヘ
ニオ, ingenio）跡。

メキシコ・グァナファート州にあるバ
レンシアーナ銀山跡、左遠方は、現バ
レンシアーナ銀山。鉱山所有者もアシ
エンダの経営に関係していた。



て、同一家族により所有されていたアシエンダも存在する。しかし、多くの事例研究は、植民地時代以来相続または売却を通じてアシエンダの分割や併合が盛んに行なわれてきたことを示している。

また、教会所有地の問題も土地集積に係わる重要な論点である。スペイン人による新大陸征服以来、教会は王室の保護を受け、土地を中心に財産を集積してきた。メキシコにおいても、19世紀中頃にフアレス大統領により行なわれた自由主義的改革(レフォルマ, reforma)以前では、それは膨大な額に達していた。L・アラマンからマクブライドに至る学者により、レフォルマ以前に教会は、メキシコ全国土の半分に当る土地を所有していたと指摘されてきた。しかし、M・ベリンヘリとI・G・サンチェス(18)またJ・バサン(19)は、教会が実際に所有していた土地はそれよりもかなり少ないと指摘している。そのなかでもバサンの研究は、十分な資料批判を行なうなど方法的にも手堅く、その信頼性は高い。

5 労働力

アシエンダの労働力として、従来から債務によりアシエンダに緊縛された債務ペオンが支配的なものであると考えられてきた。この考えは、早くも1911年のターナー(5)の著作のなかに見られ、それ以後タンネンバウム(7)をはじめとする多くの研究者により支持されてきた。

しかし、最近のメキシコ人研究者による事例研究では、アシエンダ労働者の多様性、流動性が指摘されている。たとえば、バサン(10)は、アシエンダ労働者のなかにも占める小作の役割に注目し、レアル(15)は、アシエンダ労働者の分類を行なっている。また、定住ペオン全部がアシエンダに債務を負っていたわけではないことや(10)、定住ペオンの生活状況は、食糧の支給などにより臨時ペオンと比べ安定していたという指摘があり(10)(17)、アシエンダ労働者=債務ペオン説に対する見直しが行なわれている。

6 市場と利潤

アシエンダの市場をめぐる問題、またその利潤に関する研究は、アシエンダ研究全般にかかわる重要論点であるが、この方面での研究蓄積はいまだに少ない。そのようななかで、D・プレイディング(20)は、レオン地方のアシエンダについて、その市場と利潤に関する事例研究を行なっている。またJ・F・リアル(15)もバージェ・デ・メヒコ地方のプルケ・アシエンダについて、市場の動向とアシエンダ内の2生産部門(市場向け生産部門と自給用生産部門)の比率の推移についての優れた実証的研究を行なっている。この分野の研究が進むことは、アシエンダの構造や機能を解明するうえできわめて重要であり、今後一層の事例研究の拡大が望まれている。

7 生産様式論争

アシエンダの生産様式をめぐる議論は、マルクス主義経済学者・歴史学者を中心にこれまで盛んに行なわれてきた。

アシエンダを封建的組織として捉える論者にJ・ランバーとJ・C・マリアテギがいる(文献の(1)参照)。これに対してA・フランク(14)は、アシエンダがヨーロッパの封建領主によりラテンアメリカに持ち込まれたものではないと主張し、その持つ商業的性格を強調している。

こうした対立する諸見解のなかで、E・セーモ(11)は、アシエンダを封建制から資本主義に移行しつつある社会に出現した組織として捉えている。彼は、アシエンダが資本主義的生産活動と非資本主義的な制度を併せ持っており、封建制から資本主義へ移行する社会に適合的な組織であると主張している。

一方、非マルクス主義者であるR・キース(2)も、アシエンダには領主支配が認められない他、それが利潤を生じる組織であることからアシエンダ封

建制組織説を否定している。彼は、アシエンダが経済的組織であると同時に社会的組織であるとの認識から出発し、後者の面からもアシエンダの機能を解明しようとする試みを行なっている。

おわりに

以上みてきたように、現段階のアシエンダ研究は、事例研究の積み重ねにより、1950年代までに主として外国人研究者により作られた通説を修正する方向にある。また、そうした事例研究の蓄積は、単にアシエンダ研究の発展に寄与するばかりではなく、これまでのラテンアメリカ経済史に再考を促し、より完成度の高い通史を再構築しようとするきっかけとなっている。そうした実証研究の蓄積のうえに立つ新しいラテンアメリカ経済史像を作るためには、事例研究がそれのみで終わるのではなく、比較研究や他分野との共同研究を通して、一般化への試みを行なうことも忘れてはならないであろう。

〔文献リスト〕

- (1) Mörner, Magnus, "The Spanish Hacienda, A Survey of Recent Debate," *The Hispanic American Historical Review*, Vol. 53, No. 2, 1973.
- (2) Keith, Robert G., *Haciendas and Plantations in Latin American History*, New York, Holmes, 1977.
- (3) Duncan, Kenneth and Ian Rutledge ed., *Land and Labor in Latin America*, Cambridge, Cambridge University Press, 1977.
- (4) Molina Enríques, Andrés, *Grandes problemas nacionales*. México, Carranza e Hijos, 1909.
その後何度も再版され、本稿は、Ediciones Era 1978をもとにしている。
- (5) Turner, John Kenneth, *México Bárbaro*, México, Editorial Época, 1978.
- (6) McBride, George McCutchen, *The Land Systems of Mexico*, New York, ----, 1923.
- (7) Tannenbaum, Frank, *The Mexican Agrarian*

Revolution, New York, The Brookings Institution, 1929. 本稿は, Archon Books, 1968 をもとにしている。

- (8) アシエンダに関する書誌としては, 次のものがある。

Leal, Juan Felipe, y Mario Huacuja Rountree, *Fuentes para el estudio de la hacienda en México, 1856-1940*, México, Universidad Nacional Autónoma de México, 1976.

メキシコ社会経済史の書誌としては, 次のものがある。

Rosado, Diego G. López, *Bibliografía de Historia Económica y Social de México, I-XIII*, México, Universidad Nacional Autónoma de México, 1979.

- (9) Florescano, Enrique ed., *Haciendas, Latifundios y Plantaciones en América Latina*, México, SigloXXI, 1975.

- (10) Bazant, Jan, *Cinco Haciendas Mexicanas*. México, El Colegio de México, 1975.

- (11) Semo, Enrique, "La hacienda mexicana y la transición, del feudalismo al capitalismo," *Historia y Sociedad*, No. 5, 1975. (原田金一郎訳「メキシコのアシエンダと封建制から資本主義への移行」〔『大阪経済法科大学経済学会』第4巻1号 1979年〕)

- (12) Wolf, Eric R., and S. Mintz, "Haciendas and Plantation in Middle America and the Antilles," *Social and Economic Studies*, No. 6 1957.

- (13) Chevalier, François, *La Formación de los Latifundios en México: Tierra y sociedad en los siglos XVI y XVII*, México, Fondo de Cultura Económica, 1976. (Traducción de Antonio Alatorre, Título original, La forma-

tion des grands domaines au Mexique: Terre et société aux XVI^e-XVII^e siècles)

- (14) Frank, André Gunder, *La agricultura Mexicana: Transformación del modo de producción, 1521-1630*, México, Ediciones Era, 1982. (Traducción de Jorge Aldama, Título original, Mexican Agriculture 1521-1630)

- (15) Leal, Juan Felipe and Mario Huacuja Rountree, *Economía y sistema de haciendas en México: La hacienda Pulquera en el cambio, Siglos XVIII, XIX y XX*, México, Ediciones Era, 1982.

- (16) Borah, Woodrow, *El siglo de la depresión en Nueva España*, México, Ediciones Era, 1982.

- (17) チャールズ・ギブソン (染田秀藤訳)『イスペインアメリカ——植民地時代』平凡社 1981年。(Gibson, Charles, *Spain in America*, 1966)

- (18) Bellingeri, Marco and Isabel Gil Sanchez, "Las estructuras agrarias," en Cardoso, Ciro, *México en el siglo XIX (1821-1910), historia económica y de la estructura social*, México, Editorial Nueva Imagen, 1983.

- (19) Bazant, Jan, "La desamortización de los bienes corporativos en 1856," *Historia Mexicana*, Vol. XVI, Núm. 2, 1966.

_____, *Los bienes de la iglesia (1856-1875)*, México, El Colegio de México, 1977.

_____, "The Division of Some Mexican Hacienda during the Liberal Revolution 1856-1862," *Journal of Latin American Studies*, No. 3 1971.

- (20) Brading, David A., *Haciendas and Ranchos in the Mexican Bajío, León 1700-1860*, Cambridge, Cambridge University Press, 1978.

(うさみ・こういち/中南米総合研究プロジェクト・チーム)